

環境認識とその変遷の研究

「環境認識」調査覚書

香月 洋一郎

はじめに

当初の計画

5年間の枠組みの中で「環境認識とその変遷の研究」というテーマで動いた作業班の活動の進行状況は、そうはかばかしいものではなかった。まず、その経緯を少し説明しておいたほうがよいと思う。

前述のテーマのもとに、当初想定したのは東日本と西日本の山間のむらの環境認識の変遷へのアプローチである。調査のテーマ、それにその予算と割き得る時間や人数を考えると、そう多くの地域での調査は困難だった。

「環境認識」との表現を使ったものの、まず「環境」という言葉自体、きわめて広く、また流動的な意味で使われている。「環境問題」といえば、これはある特定の方向性を持つ言葉になる。「歴史環境」、「社会環境」という語では、その環境の方向性を前に置かれている言葉が規定している。元来、人々が生きていくために自分をとりまく世界に働きかけ、その行為の中で生まれ、伝承されていく技術、作法、儀礼、価値観などは、総体として「民俗」という語でくくられる世界の半ば以上を占めているように思う。つまり「民俗」という概念自体が環境への認識、対応を大きく前提として考えられだされたものであろう。「環境認識」という言葉を考えていくことは「民俗」とは何かということをどこかで同時に考えていかねばならない作業になる。

「環境認識」という言葉自体が多様に使われ得る以上、この言葉をかかげての調査は、きわめて曖昧な世界に流れこんでしまう可能性を持つ。

そのために西日本と東日本の山のむら——いずれ

も焼畑や狩猟がかつて大きな比重を占めていたという共通性を持つ地域——を2つ選び、そこにすでにフィールドワーカーとして20年ほどは通っている人間（といってもその一人は私になるのだが）が、口頭伝承と現況の記録を中心にこの50年ほどの生活の移り変わりをテーマとして、それもあくまで現在を基点として比較する形でレポートが書けないかと考えた。高度経済成長の前と後の生活変化はきわめて大きいはずであり、この50年ほどの流れにこだわったのはそのことによる。そのような形で対象の性格を限定して、「環境認識」という言葉が曖昧に流れることへの歯止めにしようとした。

この2地域とは、西日本は高知県長岡郡大豊町立川仁尾ケ内であり、東日本は長野県下水内郡栄村小赤沢になる。前者は私が担当し、後者は田口洋美氏（現東北芸術工科大学）が担当した。田口氏も担当する地域については20年ほどのフィールドワーク歴を持っている。

COEが始まって2年目の秋、私が担当する立川仁尾ケ内は2ヵ月弱の間に5回の大きな台風に襲われ、25年の年月をかけて造った砂防ダムが全壊し、むらは大きな被害を受け、むら自体の再編成すら考えざるを得ない事態になった。このことで調査は一時中断せざるを得ず、その後むらが多少なりともその被害から立ちなおるのに2年ほどの時を要した。5年目のCOEの最終年度は調査のための予算は組まれないことになり、結局この調査は中断のままに至った。

また、田口氏にCOEからの調査依頼をお願いしたのは氏が東大の大学院の博士課程在籍中の時期であったが、COE3年目の春から氏は山形市内にある東北芸術工科大学に教授として就任することが決ま

った。これはきわめて慶賀すべきことなのだが、就任後しばらくは本務校の業務に専念せざるを得ない状況となり、この調査も中断を余儀なくされた（氏の成果の一部は2004年9月のCOEの全体研究会において発表）。

さて、では残りの2年の作業をどのように進めるかを考えた時、当初、もしできればこれも、と考えていたプランに短期間ながら取りかかることにした。それは考古学の立場から中世の鎌倉の環境を研究されてきた河野真知郎氏との共同作業である。ただし、この作業も河野氏のやむを得ない事情から氏の参加は1年に限られたため中断する形となり最終年度をむかえるに至った。なお河野氏の成果は2007年度のCOEの年報及び「ニューズレター」No.15に発表されている。

上記のように5年間のプロジェクトとしてはきわめてまとまりのない作業の流れになるのだが、以下、その世話役をつとめた者として、半端な形でも「環境認識」をテーマとするフィールドワークについて、これまでのデータをもとにしていくつかの問題点をここで述べることで責をふさぐこととしたい。

I 海人のむらの フィールドノートから

(1) —— 変わりゆく視座

社会のなかの技と芸

人が生きていくために環境にどう働きかけ環境をどう把握してきたのか、その体系と蓄積が民俗学の対象の半ば以上を占める、と前節で述べた。しかしそれを把握することはそう容易ではない。私になじみのある生業の分野でいくつか例をあげてみよう。

たとえば鍛造職人、いわゆる鍛冶屋の世界。

時代の進歩が必ずしも職人の技や知恵の発達をうながすわけではない。むしろ職人の技や知恵を規定するのは時代性や社会性といった言葉で括られる諸状況の中にある。

きわめて大まかに言ってしまうと、切磋琢磨する多くの同業者にいかにとりかこまれているか、口う

るさいが理にかなった要求をする顧客といかにつながっているか、そうした状況は職人の技や知恵に大きく反映する。その意味では現代の鍛冶職人は、2世代あるいは3世代ほど前の職人に比べて必ずしも「技術のレベルが高く」、また「恵まれている」とはいえない。とはいえ、彼等が現代職人として暮らしをたてているのであれば、その技や知恵の中には十分に現代性というものが息づいているはずである。それは、ある技術や知恵のレベルを前提とした上で、環境が規定した職人の姿である。そして彼が認識し把握している稼いでいくための世界——彼の製造物に内包される技術まで含めて——、それが彼にとっての「環境」であろう。

また、たとえば猿まわし。1960年代半ばに一旦壊滅していた猿まわしというこの大道芸は、この20年余りの間に現代の芸としてみごとに復活した。こうした復活の姿をみせた大道芸はきわめて少ない。現在全国には200人を超す猿つかいがいるといわれている。彼等は、江戸時代の、もしくは明治時代の芸態や世すぎの姿勢を継承するだけでは、現代社会で生きていくことはできない。猿の調教のレベルにおいて過去の同業者のレベルを目指しつつも現代の猿まわしとして現代史にどのような形で登場し得るか、たえずその問いと向きあっている。彼等の芸態の中に、リアルタイムで存在している技と知恵こそが現代の彼等にとっての「環境認識」であろう。

たとえば端的にすぎたかもしれないが、「環境認識」の調査とはいわゆる定点観測的発想での把握には大きな限界を有するようと思われる。「定点観測」という表現を使えば、木陰に設置した百葉箱で日々変わる温度を観測していくようなイメージがある。はたして百葉箱のような普遍的な観測基準を設置できるのか、かりにできたとしても、その場合「普遍」とはなにで、その発想にもとづく方法とはどういうものなのか、それが本質的な問題となる。もちろんその「環境」への「認識」を規定するのは時代であり社会であるが、これを時代論、社会論の内に収束して位置づけ切ってしまうと、これまた「方法としての環境」を模索する意味は半減しよう。

そうしたやっかいな一面を、以下私が調査を行っ

写真1 海人の操業 その1 (長崎県佐世保市。撮影は1994～2000年)



写真1-a アマデンマ(海人船)の船頭と海人。海人は船のすぐそばの海面に頭を出している。船尾にスマンカ(三角帆)を揚げ船首を風上に向ける。



写真1-b 海に入る海人。手前のロープはフンドウ(おもり)のロープ。これを持って潜っていく。



写真1-d 海底で藻の中に頭を入れてアワビを探す。

写真1-c 左手にフンドウがついたロープ、右手にアオッカ(アワビカギ)を持って海底へ。



た2つのむらの事例を示すことで述べてみたい。

(2) ——海の変化

1996年7月上旬

まず、息ごらえをして潜る、いわゆる素潜りでアワビを採ることを生業とする海人のむらでの事例になる。私が10年余り通っていた海人のむらが長崎県佐世保市にある。私がここに通った10年余りは、アワビが高値を呼んだいわゆるバブル末期から、資源枯渇でアワビの水揚げが見るも無惨に減少していった時期と重なる。

海人の漁期である夏にそのむらに入ると、私はいつもある一人の海人のお宅にまずあいさつにあがる。そしてその年の海の様子を聞く。彼は1951年生まれであり、このむらの現役の海人の中では最右翼の稼ぎ頭で、中学卒業後ずっと島に残り、海人を続けてきた人物である。

たとえば1996年7月上旬、彼のお宅にうかがって、「どうですか。今年の海は」と聞いてみると、

「今年のアワビは元気がなかです。私だけじゃない、ほかの海人も言いよった。アオツカン使わんで手で採る時は、パッとほぐか、ちょっと突いて採るかですが、私はパッと引っぱってはぐことが多いんです。指突っこむようにして持つ。下がトロイ（平ら）と押します。下がガタガタしたとこやったら、それは押すと（アワビの）身がいたむ。Uターンしてむらにもどって海人やる人は、はじめの4、5年は慣れんから『（アワビ採る時、身に）傷が（ついてしもうて）、傷が』ちうて困っとるです。アワビはガタガタしたとこによおるんですもんね。その手応えが今年元気なかが。採って船にあげてみて身動きがおとなしか。這う力も弱か。元気がなか。オガイ（クロアワビ）なんかは心配感じたら尻に帆かけて逃げよったが。昔は陸に置いとつても貝柱持ちあげて動きよったが」。

「今年はわりと海が澄んどるほうです。今年の水揚げはいまんと去年とそう変わらん。ずうっと（漁獲は）上がっていきよるですばって型が小さかです。去年も『小さかなあ』て言いよったばって、また一段と小そなって、めったに大きいんがなかで

すね。去年はたまに『あー（これは）ふとかねえ』ちうとがあつたですばって今年はこのくらい（15～20cm）ですもんね。それより大きいとがなかですもんね。（ひとつで）500（g）とか700とかなかです。まあ300でスンポイタ（寸法板。採取を許可されている全長11cm以上のアワビかどうかを測る板）とけんかするげなんばっかし。けどそげなんが初日から30も40も採れるんは採れるんですよ。ただキロがいかん。まあ業者はよかろうな。価格も手頃なもんで大きさがそろって」。

「けど今年も海藻が多か。何年ぶりやろか、よう茂っとる。アワビ（の身）がカラから出とらんですもんね。カラにおさまっとる。それで肉薄やけ『なんで肥えちよらんのかな。海藻生えとるとい』てみんな言いよるとです。水温は例年より少し上かなあ。ぬくか。（水中）メガネかけとって暑かもん。きのう大きい雨降つたでしよ、あれで中がだいぶぬるうなとるですばい。ぬくか。ぬくかとは上だけです。海の中に入つたらいつもの海と変わらん。雨が降りこんだあとは、藻が足にからまったらボワッて根が抜けるとです。ひと雨ふた雨降つたらくさる。こんど降つたら抜けるでしよ。抜けた藻は潮目のとこにかたまるでしよ。こないだはそれで海面が走れんごとあつた。枝だけ残つて葉がとれてホネだけになったとこになってセ（海中の岩場）につくとです、べたっと。セにつくけんアワビが採れん。はじめポッと抜けて次にベタッと寝て、それから風で流されて。大浜海水浴場の沖、藻がかたまるとです。そうなつたらどうもこうもならん。今抜けよるんはホンダワラです。4月5月は一番伸びとります。ひと雨ごとに抜ける。カジメは台風がこんかぎり9月にならんと抜けん。

今ダッコちゃん（ネオプレン製の黒色のウェットスーツ）着とるけよかですけど、禪で潜りよつた時は、ガサガサして体がいたかつたですよ。ジカジカジカジカして、おかに上がつたら皮膚がつっぱってもうて、バリバリバリバリしよつた。海に入つたらもともどるとです」。

その翌1997年の同じく7月上旬

「みんな今年はいくらか少ない言いよです。そう変わらんとばってね。獲れ高は去年と同じくらいあがるとです。海に入った日数は今年は何日が多いかもしれん。10日ぶっとおしで入っとります。こんな行ったんははじめてやね。それでそのあと2日間ずる休み（笑）。行ったら行けるとやけど、『つかれたけ、休もうや』いいあわせて。透明度は、去年はにごっちゃったがあれまではない。けど（漁期が迫って）『あした入ろーか』ちう時、海ん中がにごってきた。それまでよかったとです。ドウガハナ（むらの北東にある漁場）の先の禁漁区に海人の漁で入らんと、漁の始まる2、3日前に（侵入禁止の）目印のブイをうちにいったとすばって、海の中はきれいでした。『こら、今年はやか海入るばい』て言いよった。そいで2、3日したらにごってきた。水温上がるとは早かったですね。今水面で23度くらい。ふつうは6月に入る時冷めとて7月に入ってぽんと上がるっちゃが、今年6月に入った時点で上がった。いつも寒かとやけど、寒なかったですもん。7月は潜りよって眼鏡が汗でかすみよった。

海藻は減ってます。カジメは変わらんのやけどモ（ホンダワラ類、ドンダラモという）が少のうなった。（丈が短くて）水面に寝らんですもんね。少し前までは5月のナガシ（梅雨）で切れて、盆あけに新芽が出よった。最近切れても早目早目に新しい芽が出よる。周期がずれよる。モの種類も変わるとります。今ふえてきたんはジバサモちうて、ホンダワラはホンダワラやが背が低い、1mくらいしか伸びん。長く伸びて海面に寝るようなホンダワラやない。

海人の入るところは海藻があります。磯（陸寄りの岩場）が全然なか。やから放流しとるアワビの稚貝も育たん。おおかたウニが海藻の小さか新芽を食べるとでしょうね。芽が伸びるひまがない。昔は磯も海藻が多かった。海藻で暗うなるくらい。そこでガゼ（バフンウニ）採りよった」。

この頃、この町では地先の海の2ヵ所に、石とコンクリートで海藻バンク（海藻を繁殖させるための施設）をつくっている。

こうした磯焼けの予兆は、あるいはもう少し早くからあったのかもしれない。まだカジメが多かった1991年の夏、一人の海人がこう話していたからである。「今のカジメは昔のカジメとは違うとる。昔のは根が太うてしっかり張って台風でも耐えた。やからカジメの中に頭を突っこんでアワビ探すんが大変やった。今の（カジメ）は根からスポッととれるんやがね」と。

なおここでいう水温は海水表面の温度である。1980年代半ばから船には水温計が設置され、操舵しながら常に海面の水温がわかるようになっているが、海人の彼は釣り漁の折にも常に水温に目配りをし、その年々の水温をこまやかに把握している。

翌1998年7月

「今年水温が高い。上がるんが早か。春にぼおんと早めに上がった。ホンガツオがどんだんのぼりよる。イサキはふつう6月からやか今年1カ月早まった。去年、海人が終わって盆すぎに海の温度が32度か。何年か前までは見たことのない水温や。この2年くらいそうですね。沖のほうがぬくい。島のきわが20度の頃、沖は23、4度。

今年アワビは少なか。平均よりいくらか落ちとる。見える範囲カジメがなか。去年カジメのあったところカジメがないとです。大浜の先のオオゴラウチの漁場、海藻がのうてセが白けとる。（海藻が）ピラピラもしとらん。昔はぎっしりあった。カジメがあつてアワビが採れんとなら、（アワビは）どっかにおると思うとやけど、エサになるカジメがないといかにもおらんと感じます。カジメがあるとは地まわりだけ。5月の磯の口あけ（地区ごとの磯からのウニ、貝、海藻採り）もウニがガゼに身が少ししか入とらん。それだけ食べるエサがなかとでしょうね。ただ、サザエは多いです。今月の（この地区の漁協の）目標は23トンやったが今日（18日）で終わる（目標に達する）。キロ700円ほど。それ以上の値は望まれんですよ」。

といっても、この地域ではこの年までカジメを五島列島の地方に増殖のため分けていた。前述した2ヵ所の海藻バンクからだけでなく、このむらの磯か

写真2 海人の操業 その2 (長崎県佐世保市。撮影は1994～2000年)



写真2-a 海人が海面から船べり越しにアワビを船頭に渡す。手前に写っている容器に水揚げされたアワビ、サザエが入っている。

写真2-b 皮の空気袋がついたかつての水中眼鏡。これの前はゴーグルタイプのもが使われていた。現在は鼻までマスクがかかる形のもが使われており、この百年余、より潜水に向くよう改良されてきた。



写真2-c 海藻のない海底。かつて海人の古老はこうした海底の様子をシラケパンヤと呼んでいたという。



らもカジメを切って分けている。これは胞子が出る時期にカジメの根を切り、テンマで山積みにして五島方面に運んでいた。それまではむらの防波堤の下をのぞいて見ると、カジメの茂みがずっと堤に沿って続いていた。この翌年、それが消えた。海藻の微減が続いていたのが、ある時、突然激減したという印象になる。

彼の奥さんは結婚して以来欠かさず、鮑の漁期の毎日の水揚げ記録をノートにつけていた。私が7月にうかがうと、それをひろげて、去年の水揚げは何トン、出漁したのは何日、と教えてくれていたのだが、1999年の夏からそれをつけなくなった。それほど水揚げが減った。とはいえこの地域の海人の中で彼の水揚げはいつもトップかトップに近い。「去年、26.6キロ（のアワビ）が一日の最高。海人の口あけは最初の10日が勝負。その10日に一日20キロが5回あった。今年はひどい。もう7月末やがその半分か3分の1や。6月からもぐって、葉のついたカジメは一本しか見らんやった。葉のついとらんのは、まだあるとやがね」。

この年、このむらで養殖されているワカメが少し大きくなった時に、まるで人が取ったように姿を消した。海藻がないため魚が食べつくしたという。タチアミに入った魚の腹の中からワカメが出てきたことで人による盗難でないと判断された。2000年夏に私が田平町（北松浦郡）にある長崎県の県北水産業普及指導センターで磯焼けについて聞いた折も、魚による海藻への害が一因ではないかと指摘されていた。

かつてこのむらの沖にうかぶ古志岐島^{こしき}という無人島の周辺でカジメが姿を消したことがある。これは遊漁船がつれてきた釣客がまいたエサのエビの中に防腐剤のクレオソートが含まれており、それが原因ではないかと取り沙汰されたのだが、それ以降その一帯の海底はホンダワラに替わったという。磯焼けは様々な憶測、類推を生む。それだけに切実であり、かつ正体が見えにくく不安でもある。

2000年7月

この年は黒潮が早く北上した。シビ（若いマグロ）、

カツオが早く姿をあらわした。

「こないだ大きなクラゲが来とった。あげなん見たんは何十年ぶりやろか。子供の頃来よった。昔はこないだん見たんより大きいんが来よったですよ。水温は去年のほうが低かったです。盆すぎには30度を切とった。今年はやっと上がりだした。5月6月で17、8度か。それまで海水面は15、6度やったですもんね。

今年はカジメがいよいよない。完全に磯焼けです。5月にブイ打ちに入った時、小さな芽が出とったが、それが今ない。隣の島もよくないらしいです。以前は1週間で21トンはあげよったが、こないだ10日間で10トン。半分以下や。アワビの肉も薄かもんね」。

「ちょうどUターンの若い人たちが海人やるようになった4、5年前からか、どうも海が変わってきたごたる。海は、2、3年くらいで少しずつ変わるとやけど、この4、5年、盆すぎの水温が高かいです。ちょうどカジメの葉がおちて新芽が出る頃、30度から31度、これがつづいとる。それまではその時期、あんな水温は見たことがなかったです。そのころもどりカツオが釣れだした。もどりカツオの旬は9月になってからですもんね。この4、5年、その時期に釣れる。去年は水温が30度切ったか。切ってカツオの水揚げがおちとった」。

この年、近くの高産物を扱う商店が店頭にはり紙を出した。ウニの入荷が少ない、注文はお早めに、と。こうしたことはこれまでなかった。この夏、むらの海人は15人ほど。60代が3人、50代が2人。最年少は32歳。

(3) —— 白い海底

2001年6月

気になっていた前年の水揚げを聞いてみた。長崎鼻（このむらの海人の主要な漁場）での水揚げは、はかばかしくなかったという。

この漁場は、「船頭のおじさんと話したことよ。長崎鼻でむらの者はどれだけ水揚げしとるかわからん。アワビ、ウニ、海藻、この海は宝物よね」、「海人で長崎鼻に行くちゅうたら、銀行に通帳持ってお金おろしに行くようなもんですけ」といった言葉を

頻繁に聞いた海である。

「今まで最高によかったところが全然だめですもん。おとしよかったところがヘタ（陸寄り）までな一も（海藻が）ない。稚貝の放流にこの2月に入った時、場所によっては15センチくらいカジメが伸びとったところがあったけど、夏に入ったらな一もない。魚に食べられたんやろか。どうもここんどこ水温が上がったことも（原因として）あるっちゃろうね。昔、アオブダイやらおらんかったけど、ふえた。少し前まで32度とかいう水温はなかったもん。南のほうのゴマイシダイとか今まで来んやった魚がのぼってきとる。こないだテレビで天草でサンゴが増えたといいよったけど、見たことんない海藻も増えとる。ホンダワラやないんです。ホンダワラはのうなっただ」。

「長崎鼻の燈台の先あたり、去年だめやったけど、昔は海藻が多かったですよ。茂って杉林のごとあった。海藻のすきまからちょっと下が見えるだけ。よっぽど大きなセ（海底の岩場）やないとカジメの林で見えん。裸でオヨギよった時分は、ひとシオ7回からまあ12回くらいでしょ。体寒い見えにくいわで、あせってもあせっても先に進めんごとあった。勘あたりをつけて行きよった。クロモゼ（漁場のひとつ）で去年7月、大きなカジメがあって大きいアワビがおった。その夏はそれまで大きなカジメを長崎鼻で見んやった。クロモゼで久しぶりに見たもんやから『なつかしかあ』ちう感じ。『ここはこげな藻があるとばいね』。昔は大風が吹いたらイソベタ（波打ち際）に切れて流れついたカジメが1メートルくらいの山になってずっと続いとった。台風でどのくらいのカジメがちぎれて流れついたんやろか、ちうくらい。それでも昔は切れても切れてもカジメが茂りよった。盆すぎになると海の中にカジメの幹が、松喰虫にやられた松んごと骨だけになって、あとはきれいになくなとった。翌年に葉が出て畑のごとなった。磯焼けする前も、この骨は残とった。ただ、根が弱かった。それまでやったらさわっても根が抜けんやったとが、にぎったらポロッと欠けるごとなった」。

「磯焼けは沖から来た。オカ（陸寄り）からやな

い。沖の海藻がまばらになって、それが急にオカのほうに寄せてきた。来かたは早かった。今年は、この家の前の波止のきわにも藻がない。上から見てもない。それまではいくらかぴらぴらしとった。この前にある前子島に、磯が始まる前にブイ打ちに行くとやけど、それまでは島のふちの瀬にずうっとカジメもモもあった。今年はそれがない。かげも形もない。海藻がないけんウニが岩の上にはばらまいたごと見える。これだけないとどうしていいかわからんですもんね。それでもミカサンバナ（むらの港の西の岬）から西はまだ少しは藻が見える。東はいよいよなあもないが。去年だめやったけん今年も期待はしとらんとやけど、入ってみんとわからん。海の中のことやけんサザエでもおってくれりゃよかとやけど」。

2002年7月

「春の磯の口あけの時見たら、いよいよ磯にも海藻がなかですもん。セが砂をかぶってしもうて、砂まじりの草みたいのがセについて、もったらゴボツととれる。セの地肌が見えん。海藻は生えんでしょ。昔は磯は潮が引いたらヒジキ、ワカメがダーツとあって磯が見えんごとあった。この数年、ここに台風は直撃しとらんとですが、直撃して海ん中ば混ぜくってもらわんばあ……」

この稿でたびたびふれる磯の口開けとは、海にもぐっての海人漁ではなく、大潮の日にはむらびとが総出で陸から貝類や海藻類を採る日のことである。なお、この年、彼の海人漁は漁期中通算で10日ほどに減った。他の日はイサキ釣に出た。

「みんなイサキに動きよる。タチウオとかイサキとかいいんですよ。なんとか食いつなげると神様が考えてくれとるとです。漁協の統計じゃ平成10年までタチウオはなかとです。もとからおったとでしようね。イサキ釣りよってかかりよったもん。専門にタチウオやる人おらんかった。技術ばなろうてきたんです。ほんとは海人ばしたいんですけどね。今年はクロアワビで1キロ5400円、バブルの時の半値や。けど盆までまた潜ってみようかと思えます」。

この年から漁協の合併で従来より広い海域で潜ることができるようになった。しかしそうなった時には潜る人がほとんどいなくなっていた。

2004年7月

「浅いところは藻が生えとる。昔からあった種類の藻やなか。丈が30センチくらいの私が見たこともないような藻です。長崎鼻も瀬のふちが見えんごと生えとる。あれが大きくなって、も少し沖まで出てくれりゃいいんですが」。

「海は回復しよるんやないですか。太古丸（博多からのフェリー）の入るアシカ島の波止の根っこ、内側にカジメがべったりついとる。春の磯の口あけの時、ウニガゼなんかわりと身が入るとる。藻ば食うとる」。

こうして一喜一憂しつつも、資源枯渇を感じているのは海人だけではない。この地域のむらは各々に磯ものを採取する磯を持っており、前述したように、春から夏にかけての大潮の日、干潮時を待って各々陸から海藻、貝、ウニなどを採る。その年の1回目の磯の口あけが迫ると、今年はウニは多いだろうか、豊かに身が詰まっているだろうか、その年の海の様子をみな気にしている。

2004年のアワビの海人全体の総水揚げは1.5トン を切った。「昔の俺の一人分やけなあ」。

それ以降、2007年夏までのアワビ漁は、さらに下降をたどった。毎年、海の様子を語ってくれていた彼も2004年からは、海人の漁期中、海人とイサキ釣りを並行して行うようになった。古い海人は年をとり海人漁をやめ、若いUターン組の海人は、海人稼ぎに見切りをつけ、このむらでまがりなりにも海人漁を行う者は、2005年には、2、3人になった。こうした動きに2、3年ほど先行するかのように、海人社会は崩壊していった。旧5月3日に行われていた海人のセマツリは、1990年代半ばからは旧暦通りには行われなくなり、2000年には海人漁の口あけの願立てとまとめて行われるようになった。朝、海人が集まってその日出漁するかどうかを決める浜での寄りあいも2000年に中止になった。祐徳稲荷（佐賀県鹿島市）への海人のうち揃っての参詣も止

んだ。

2002年、波止につながれているアマデンマ（海人漁専用の船）の間から、温かい海に多いハタタテという魚が泳いでいるのが見えた。海温の上昇の話 を聞きつづけていた時だけに、この魚の泳ぐ姿は妙に印象深かった。

「磯焼けは、あつという間に来た。けど海藻が回復するのは少しずつ少しずつやね」、海藻の回復のかすかな兆しが見えた2006年夏、そんな声を耳にしたが、1928年に鮑集組合を結成し、集団としての意志を明確にして動きつづけてきたこのむらの海人社会の紐帯が崩れるに至るには、1990年から10年とはかからなかった。

2005年7月下旬

「水温は今年は急に上がった。6月冷めたかったとがゆうべは26度より上か。この何日かは1日1度ずつ上がりよる感じがする。カジメもモももうなか。草みみたいな海藻があるだけ。それがセをおおいつくしてしもとる。サザエも少ない。形はよかです。しかしきれいな若いサザエや。年くったサザエやない。大きさはあっても。フジツボとかもついとらん。なんか自然のにわとりの卵とプロイラーの卵のちがいのごとある。海藻も去年くらいから増えよる。けどもとの海藻やない。なんちう名やろうか。カジメは見らんですね」。

ク口、アカ、メタカ

「暗い年、雨の降る年は海藻が多い（芽の出が良い）」という伝承がこのむらにある。またかつての古老は、「冬に雪が多い年はアワビが多い」とも話していたという。海藻は水温が低いほうが繁殖活動が活発であるというが、そのことと通底していよう。かつてこのむらの人たちは磯でヒジキ、フノリなどを採っていた。人々の中で漠然と寒のした年は採れ高が良かったという記憶がある。

もとより、今後磯焼けが回復すれば、海人漁が息を吹きかえす可能性はある。カジメ類の回復が成れば、従来の豊漁が期待できる海人漁だけに、海藻の生育状況は、毎年一喜一憂が続いている。素潜り漁

は設備投資が少なくてすむ漁であり、水産物としてアワビはきわめて値が高い品物である。

「今年はどうですか」、と声をかけただけで彼の口から海の世界が次々と広がっていく。「環境認識」の調査とは、たとえばこうした記録を積み重ねていくことから始まるのかもしれないのだが、しかしここではもう少し資源枯渇の話をつづける。

このむらの海人の人たちの、往時からこれまでの話を聞くということは、結果としてやせていく海を確認していくことでもあった。だからこそ、つい最近までつづいてきた海の豊かさは、アワビ談議として語られ始めると逆に止まることがない。

このむらで採られているアワビには、クロアワビ (*Haliotis [Euhaliotis] discus* Reeve)、メガイアワビ (*Haliotis [Euhaliotis] sieboldii* Reeve)、マダカアワビ (*Haliotis [Euhaliotis] gigantea* Gmelin) の3種がある。クロアワビはカラも実の感じも全体に黒っぽく、マダカアワビは放水孔の縁の突出が他の2種よりも高く出ているためこの名がある。

このむらで通称クロとはクロアワビのことでオガイ、あるいはオトコアワビとも呼び、メガイアワビをアカあるいはオンナアワビと呼んでいた。マダカアワビはメタカと呼ばれ、これはアカに分類されて出荷されている。むらの海人がこれらを種の違いと認識したのは、養殖が始まりアワビについての知識が普及してからのことで、かつては漠然とクロとアカを同じ種の雌雄だと思っていたという。

鮮貝で出荷する現在、最も高値なのはクロである。値は毎年、漁が始まる前に買付業者と海人の代表（現在は漁協からの担当者）が集まり、入札で決めているのだが、この時まずクロのキロあたり単価を決める。アカは自動的にその六掛半（65%）の値に定められる。

クロは他の2種に比べてカラが少し薄く、総じて生きがよく、身のもちがよい。そのため鮮貝として喜ばれるのだが、干して加工する明鮑の時代には、逆に身が厚い分干しにくく嫌がられていた。もっとも1980年代半ばまでの明鮑での出荷の時代は、これら3種はえり分けられることはなく、一括して貫あたり（のちにキロあたり）いくらと値が定められ

ていた（キロあたりではほぼ2800円から3000円の間だったという）。明鮑をつくり出荷していた時代は、メタカは身がきれいで熱の通りがよく、干すのに手間がかからないと、クロとは逆に業者には喜ばれていた。

アカ、メタカは、このむらの漁場のほぼ全域に分布するのに対し、クロはカジメが多い場所でないと居ないという。前述したようにこのむらではモといえはホンダワラ類を指し、ホンダワラが茂っているところをモバというが、モバにはアカが多い。島の北岸には比較的クロが多いというが、この地域はよく密漁で荒らされているらしく、海人はほとんど行かない。また、クロは陸近くの浅い場所に分布するという。

1990年ごろから、Uターンで帰って来た若い人が海人稼ぎに加わる場合は、いわゆる「一人海人」での操業が多い。船頭を雇わず、船外機つきの3ヒロほどの小船に一人で乗り、トリセに着くとアンカーで船を止め、海面に浮き輪を投げ、その周囲の海を潜る。船を移動する時は一旦船に上がり、自分でエンジンをふかして場を移る。こうした場合はオキへは出ず、ほとんど陸寄りの海——ヘタマワリという——を潜る。船頭を一人雇ってオヨグ海人の姿を見なれると、この「一人海人」はいかにもアマチュア的な感じがする操業なのだが、陸寄りの浅い海には単価の高いクロが多く、また船頭に払う費用も不要なため、腕がよければ稼ぎは大きい。

アワビの出荷は重さのみではかれ、肉質などは評価に含まれないのだが、漁場の中でアワビの身が最もきれいなのは、むらの東の地域であるシモヤマベタからシモヤマオキにかけてのアワビだという。下山という集落の地先のためこの呼称がある。ここはアカとメタカが多いのだが、その身は黄色かかって豊かで艶があり、採った後も肉に張りがあって型くずれしないという。アカ、メタカが多いのは、むらの地先のドウガハナの前や長崎鼻のオオゴラウチも同じなのだが、ことにオオゴラウチのものは見た目も悪く質もおちる。

「クロは毎年サシツキ（漁はじめの10日間）は少ないが。動きがまだにぶかっちゃうね」。

「アワビは毎年おるセにはおる。来んセにはいつも来ん。なんか知らんが東向きのセには多か。西向きのセは少なか。同じセでも見る方向で見つけやすい、見つけにくいがあるけん、セの東に入る時は見つけやすいごと入らんば」。

「メガイはセにべたっとなついたらそのまま動かんやろ。オガイは動きが速か。アワビがセにすわるとセに型がつくやろ。大きいの採ったあとの型に次行ったら小さいのがすわっとすることもある。けど、オガイのおったセにはオガイが来るとよ。わしら岩にはりついとるの見つけたら、ぱっとオンかメンかわかるんやけど、オンとメタカは時々まちがう」。

こうしたアワビ談議によく出てくるのは、セ（海底の岩場）と砂底との関わりである。

「長崎鼻の燈台のところに砂が見えとるでしょ。けどそれ以外はあそこらは地まわりは磯です。岩の大きい小さいのがごろごろしとる。少し沖に出たら小さかソネ（岩場）と砂地がまじります。そんなところやったらまちがいなくアワビはおる。岩ばっかりのところは、おる時はおるけんどおらん時はゼロや。ソネばっかりのところはおるごとあるけど一回とったらおらん。ネのまわりに浜があるハマツキちゅう地形のこの、そのネのまわり、砂との境にアワビがおる。ハマツキがねらい目や。それもちょっとしたセのまわりにおる。やから見のがしがある。上手な人はそれをちゃんと採りよる。何年も見すごしたような大きいんもおるとです」。

「セの根元にぐるうとと並んでおることがある。ハチマキといいます。そげなことも昔はあったばって今はなか」。

「アワビは浜の中ではななめに立っとる。アワビの浜わたりといいます。となりのむらの海の浜の中にセがひとつポツンとあるとですもんね。ほかのセと船一ぱい分くらいはなれてぽつんとあるとです。昔はそこに2回行きよった。サシツキ（漁のはじまりの10日間）と（漁期を）上がる前と。サシツキにトリセでアワビ10個採ったら、上がる前の時期もやっぱそこに10個おるとです。渡ってくるんやろうと思うんですね。そこでほかのアワビがおらんやったら、その渡ってきたアワビがすわる。渡る時

は砂ん中におるけん体おこして牛のべロみたいに腹出して立っとる。ひらたいまま這うていくんやなかです。今年（1995年）そうやって移動しよるところを3つ採ったですもんね」。

寒い時期は、アワビの動きが激しく、暑くなると奥に入って動かないという。漁期のはじめが最も水温が低い。サシツキは、セの表に出ているだけに海人が近づく時の水圧に鋭敏だという。セに3つ並んだアワビを見つけ、息ごらえが切れるためひとつ採って一旦浮上し、息をついで潜るとすでに姿を消していることもある。この時期のアワビは身が厚く、カラは薄い。船上でのカラのフジツボ取りの作業の折、手を切ることもある。

聞き書きの位置

私がこのむらに入り始めたバブルの末期、クロアワビは消費税を含めるとキロ単価は1万円を超していた。こうした水産物はほとんど例がない。それからバブル崩壊とともに少しずつ値が下がり、1990年代半ばから資源枯渇が激しくなり、数年後さらにそれは磯焼けという形で誰の目にもあきらかになっていった。

「香月さんが来始めた頃はまだアワビが大きかったがね。水揚げもあったがね」と、この3、4年よく声をかけられるが、たしかに私がここに入り始めた頃、海人はカジメの茂った中に頭を突っこんでアワビを採っていた。私がこのむらに通ったのはそういう流れとしてふりかえり得る時期になる。

話としては、かろうじて戦前の朝鮮半島出漁や、鮑集組合初期の状況のことをうかがうことができ、アマデンマが各個に普及し、ウェットスーツを導入し、水揚げとしては最盛期を迎えた時期の話、いきいきと豊かに語り得る人に多く出会えた時期でもある。

その人たちは、自分の体験をふりかえり充実感をもって語るだけに、この10年の海に対して、自分の知っている海とは、本来こんなやせた場ではなかったはずだとの想いも自然にそこにあらわれる。資源枯渇と背中合わせのように、かつての豊かな海の懐古が語られる。もう少しつづけてみたい。

昔といっても少し前

「海人どうし話しよっても、昔話になったねえ、いよいよそみたいな感じやねえちうですもん。昔はアワビがベタベタおったですもん。自分であとずさりするごとあった。びっくりして、一瞬アオッカ（アワビカギ）抜くの忘れることがあった。びっくりして、『ウーン』、ひと呼吸おいてアオッカ抜きよった」。

「トリセ（自分が目あてにしているセ）に行ったらおったとやもん。まちがいなく。あこ行ったら一貫、あこでまた一貫。行ったらアオッカ抜きばかり、ちう感じやったですもん。セの上にアワビがベタベタ見えよった。海にとびこんだら採るだけ。息いっぱい吸って採って上がるだけ。自分で話しよって夢物語しよるごとある。禪の時代、ヒトシオせいぜい9回くらいしか潜りよらんころ、ヒトシオと今の一日分と同じくらい（の水揚げ）やったもんね。アワビも小さいんしかおらんごとなった。手にしてホーっちうごとある大きなアワビはおらん」。

「（漁の）初日なんか、はじめからアワビカギを腰から抜いて入ってよか。入りゃすぐおる。オサナカ（禪）の時分、ヒトシオで7回くらい潜るでしょ。それで30は採る。1回で5つくらい採る」。

「ずらっとアワビが並びよったね。これがアワビじゃろうか。こんなにおるもんじゃろうかちうごとおった。そんなん今は見ん。おって2つか3つ」。

「それを採るでしょ。ずっと並んどるんを。また必ずそこにアワビが来よったですもんね。今はそれなかもん」。

「ダッコチャン着てしばらくはよう採れた。（その年の）水揚げ33トンちうのが最高やったかね。あんなにアワビがおるばいとかも思わんほどおった。よけいおるのがふつうやったけん。どこいってもアワビですもん。それも背にフジツボがびっしりした大きいやつ」。

いけんなあ

腕利きの海人の間で、水揚げが少しずつおちていったと感じたのは1990年頃からだという。1996年、同乗させてもらったアマデンマが、夕方漁協の荷受

場に船をつけた。カゴでアワビ、サザエを揚げ、計測をすませ、伝票をもらう。伝票を待つ間、海人の人がつぶやく。「5、6年前にくらべたら笑うげなキロ数ですもんね」。伝票を渡しつつ、計測のおばさんが言う「今んとこ今日の最高よ」。「こんくらいでトップか。いけんなあ」と、つぶやく海人をのせてアマデンマは岸をはなれる。

2001年のこのむらの海人のアワビの総水揚げは3トン余り。1980年代はその6倍、20トン近かった。一人でひと夏に2トン近く揚げる海人もいたのである。——「私は1000キロは採りよった。採れん採れんいうても800キロ。500キロも採れんと、もう海人はやめるばいちうごとあった」。

私が調査を行なったのは、そんな時期であり、うかがった話の大半はかつての豊かな海での物語である。

波止のため息

夕方、むらの波止には誰かが出て海を見ている。三々五々出てはいるが、特になにを話すでもない。私も時々ここに来る。海人の古老が話を投げる。

「海は全然昔と違います。一年一年汚れていくんがわかる。今埋めたてて役場のあるところは、ようアワビが採れよったですもんね。子どもの時分、おやじさんが漁から帰ってくるのを待ちよって泳いでアワビいくつも採りよった。今あっちもこっちもコンクリートブロック。ヨットハーバーもできよるでしょ。あそこはオガイが多かった。穴場じゃった。漁業には金出してくれんばって、あげなんにはいくらでも出す。しょうがなくみんな反対はせん。そうしてくれんば役場もこっちのいうこときいてくれん。役場もつとめのあるですけんね」。

話の中に出てくるヨットハーバーとは、佐世保にあるテーマパーク、ハウステンボスとの連携を目指して地元がつくった施設である。ハウステンボスの昨今の経営ははかばかしくなく、ヨットハーバー自体も当初見込んでいた儲けや活気からはほど遠い存在となった。そこを利用するための車道としての橋がむらの港から架けられた。むらの人たちはこれを「迷惑橋」と呼んでいる。

たしかに私がこの地に通い始めて一年ごとにといいほどにむらに来ると、埋め立てがすすみ道路が延び町の様子が変わっていった。港の中央に4階建ての役場が新築されると、それが風除け潮除けとなり、その内側に3階建て電気店のビルができた。「昔はここは風が強うて平屋しか建てられんやったが」と、その工事を見ながらあるおばあさんがつぶやいていた。2000年にはいわゆる「百均」の店がその並びに開店していた。港内の埋立、整備が激しいため定期便の高速艇の着岸地もくるくると変わった。そうして気がつくとなぜか残っていた砂浜も姿を消した。陸地の目先の変化とどこか深いところで連動するかのようには海も変わっていったのだろうか。

「埋め立てはすすむ。その見返りはない。漁場は放棄させられて補償金はない。役場はお前のためお前のためいうて。今フェリーが着きよる先のとこ、アワビがよう採れよったですよ。一回（海を）掘っただけでパァになった」。

「昔の海はきれいやった。にごったとこなかったですもん。青うなりよった。青うなって澄んで、針一本おとしでも見えるごつあった。今はそげな海は年に何回やるか」。

これに類することは、この稿でいく度も述べてきた。おそらくこれはこのむらの波止のみでなく、現在の日本の多くの海のむらでいく度もいく度もつぶやかれている言葉の一つにすぎないだろう。

以上、私のフィールドノートをもとに少し「海人の人たちの海」について述べてみた。

「環境」の定点観測、という発想表現はもう少し先になって使いたいように思う。それよりもこうした話を聞き得ることの根源にあるものについて考えてみたい。

(4) —— 個に宿る伝承

時代の変遷

私がこのむらの海人の調査を始めたのは、すでにネオプレン製のウエットスーツが採用されて後のことになる。朝7時に港を出発し漁場に着き、夕方5時までには漁協の計測場に戻る。漁場に着くと身支

度をして海に入るのだが、海に入ると1時間半から2時間は海中で潜水をくりかえす。小さな海面移動は頻繁に行うが、これは海中から舷側につかまったまま船頭に指示を与え、途中で船には上がって休むことはない。この1時間半から2時間をヒトシオという。ヒトシオが終われば船に上がり30分から1時間休みをとる。そしてフタシオ目にかかる。1日3シオから4シオ潜り、午後4時すぎには海人の漁を終え、港に戻り、アワビ、サザエを渡して計量し、伝票を受けとって帰宅する。

ヒトシオの間の潜行回数は60回から80回、1回の潜る時間は平均して1分前後である。海人によっては1日に3百回を超す潜行を行っている。2ヵ月の漁期の間（正月の入漁日は通算すると35日前後）こうした日々が続く。これが1990年代のむらの海人の稼ぎの姿だった。

ウエットスーツ普及以前の禪の時代、さらに海人各々が自分のアマデンマを持たなかった往時の状況はまたこれとは違っている。船を持っている海人の船に便乗する形で、1ぱいの船に7、8人の海人が乗り込み、1人が船頭役をつとめ3、4人ずつ交代で海に入った。かつては船内の風があたらぬところに線香を1本立て、その燃えつきる時間をヒトシオと定め、燃えつきると次の3、4人と交代したという。現在のように海人一人一人が船を持ち、各々の意志と技量が反映する形で海面移動をしていたわけではない。アマデンマは、その船中の7、8人の海人の力関係や、多人数側の希望や判断で洋上を動くことになる。

海人は各々自分の目ぼしをつけている磯がある。それをトリセというが、自分のトリセ付近では当然のことながらその人はよく採る。その結果1人だけよく採れたとしよう。採って上がる時、次に潜る時のアワビまで見つけているほどである。他の6人には獲物がなく、洋上を少し移ろうとその面々が言いだせば、彼はそれに従うしかない。洋上を5メートル移動しても、そこから改めて潜ると見つけていたアワビは探すのは困難になる。だから昔の海人は無理をする者が多かった。潜った時に採れるだけ採ろうとして浮上する前に息を切らし、失神して船に引

き上げられた話は多い。失神する前には体の血がすうっと引く感じになり、目の前がまっくらになるという。そうなりかけた状態は船から見ていてもわかった。目が通常の様子ではないという。浮上し、かろうじて自力で船の縁を握ることができればいいのだが、それもできない時は船の中の者がそれを察し、「息が切れるぞ」と叫び船に引き上げ、うつむきにして背中を押して介抱していた。人工呼吸の知識が伝わったのは戦後のことになる。

だから船の中の長老格の海人は、浮上が遅い海人の動きにつねに目くばりをしていた。

禪の時代

ウエットスーツ以前は、オサナカという越中禪タイプの禪で潜っていた。腰にまわす横帯はワラ縄かシュロ縄であり、のちにクレモナになるが、たて帯には和手拭ほどの長さの木綿の布を横帯の縄に縫いつけて使っていた。前述したように時代をさかのぼるほど漁期は長い。オサナカの時代、春のはじめには海人は潜り始めていた。海の温度変化は陸のそれより2ヵ月遅れるとよくいわれているが、3月4月の海は身を切るように寒い。

「浮上したら海面からそのまま鮑をぼんと置けるごと、船のふちにアワビを置く手すりのような台があるとです。その台ば海面から両手でつかんでそのままその板ばひきちぎらばかりに寒か。体がガタガタふるえて言葉にならん」。

オサナカの時代は1日平均6シオだが、この当時はヒトシオに9回潜るのが平均とされていた。船に上がるとオサナカをはずし、左舷前方のマタギ（掛木）にかけ、ミノゲ（ネル製のバスタオル）を腰に巻き、ドンザをはおる。そして船のオモテに切っただある炉で暖をとり、また潜るのだが、海中にいるより暖をとる時間のほうがはるかに長かった。

現在1日に300以上の回数を潜る海人がいるのに対して、オサナカ時代は平均して1日50～60回の潜行だったことになる。ヒトシオは20～30分で、その間に7回から12回潜る。それを1日平均9回くりかえしていた。防寒と海中の有害生物からの防護機能を持つウエットスーツでの潜水は、海底状況の

把握、それに対応しての潜る目安のつけかたや方針のたてかたのいずれもにおいて従来よりこまやかになり漁への集中度や海底状況への対応力も増した。ウエットスーツと一緒にフィンも普及した。素足のキックに比べると驚くほどの推進力を持っている。こうした点からみれば海人のかつての古老の、ウエットスーツ導入による資源枯渇への憂慮も故なしとはしない。

個の伝承へ

こう書きすすめてくると、かつての乗り合いの海人船の時代から各自が船を持つ時代になり、使いやすい水中眼鏡の改良やウエットスーツの普及に至るまでの流れは、同時に海人の個人個人の技量を洗練させ、そしてその差を際立たせていく歩みでもあることが確認できる。海人漁はもともと個人漁ではあるが、その個人性をますます強めていく形で技術やシステムが展開してきている。それは集団の中に拡散して存在していた認識や伝承が、より強く具体的な何かに——たとえば個人の内に、たとえば目に見える形のシンボルに——収斂されていった動きのようにも思える。アワビを上手く採るとはどういうことなのかが、個人の体験を通して語られやすくなっていった時代と表現してもいいのかもしれない。私の聞き書きはそのことにも拠っていよう。

もちろんオサナカの時代にもすばらしい海人がいた。「あの人の生涯記録はこれからもだれにも破られんじやろう」、そう語り継がれ、「海人の神様」と称されている海人がいる。しかし、海人社会全体の知恵と技が個人という存在の中により強く収斂していく傾向、状況はこの30～40年のうちに強くあらわれてきているように思う。これまで示してきた私のフィールドノートは、そのような時代、そのような社会で生きてきた海人に向かい合っただこそ得られた面も大きい。

だとすれば「環境認識」の「定点観測」という表現を安易に言挙げできない理由の一つがここにある。この海人のむらでの記録は、また別のところでその内容を書くつもりであり、ここでは冒頭に述べたテーマにもとづいての感懐を取り上げたにすぎない。⁽¹⁾

図1 対岸の山 (本文参照)

図1-a 仁尾ヶ内の本むらの対岸、カゲジの山。

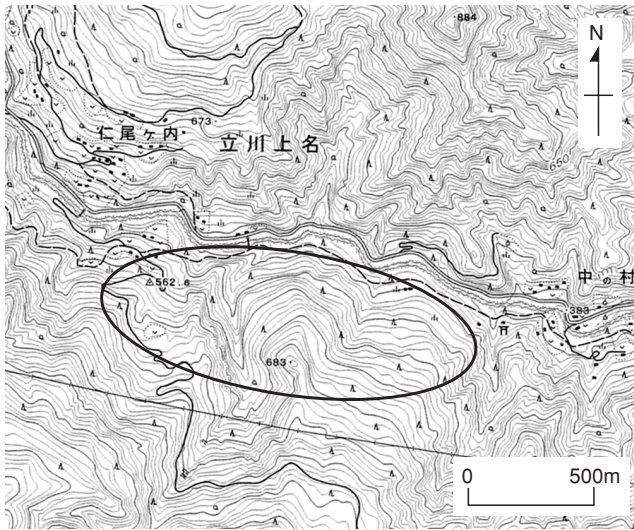
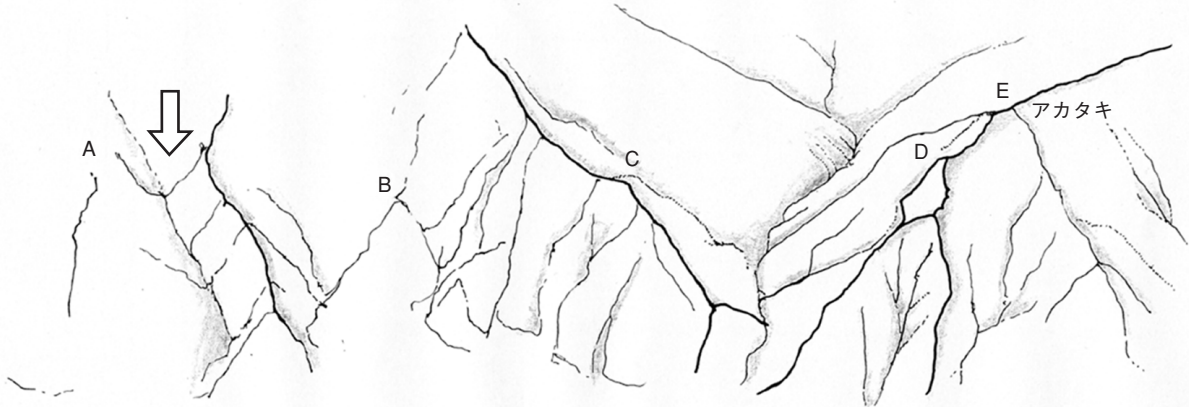


図1-b 楕円のあたりがa図の場所。地図上に「仁尾ヶ内」という文字が記されているところが本むらになる。5万分の1地形地図「伊予三島」より。

Ⅱ 対岸の山

(1) —— 焼畑のむらの生産暦から

対岸への視線

さて、海の世界から山中の世界へと移る。冒頭に述べた高知県長岡郡大豊町仁尾ヶ内のむらについても少しふれておきたい。ここはかつて私が調査に入り、その民俗誌をまとめたところになる⁽²⁾。かつては焼畑で雑穀をつくり、そのあとに三榎をつくってくらしをたててきたむらになる。このむらには永野家という旧家がある。屋号をウチノという。

そのウチノの庭先に立つと、対岸の山肌が迫っている。対岸をカゲジという。

「小さい頃から起きても寝ても、今見えとるばァしか見えんけんね。そのむこうに海があるいうけんど、これほど高うなっていきよったら、どの辺に海があるんやら想像つかなあね。小さい時分はじいさんに、ウネ（尾根）の向こうはなんじゃろと、聞き聞きして育ったもんよね」。

永野家の縁側で話をうかがっていた時、話の流れが途切れた折に、その古老、茂友さんがそう話されたことがある。この仁尾ヶ内の本むらともいえる中心集落の家々のうち、東と西とにひとときわ離れて位置する2軒の家以外は、どの家も正面にこの対岸の山の斜面を見て暮らしてきた。

かつてその視線がひとときわ鋭く、こまやかになったのは春である。対岸の山々の木々の花の

咲きかたの移り変わりが、そのまま春の農作業の始まりと段取りを示していたからである。まず春の訪れを告げるのは梅の花である。これは対岸の自生の山の木々のみでなく、家々の周囲にもいく本か植えられていた。ウチノ家の下手にも、大きな梅の木があり、これ一本で梅干が6斗から7斗取れたという。この梅の花は旧正月のセッキ餅をつく頃、雪の中で満開の花をつけた。梅の花が咲くと、それからひと月ほどで降雪期は終わった。

ただしこれは在来種の梅であり、後に入ってきた品種の梅の開花は半月ほどおくれる。在来種は白い花のみであり、また実も小つぶだったという。現在仁尾ヶ内で見られる梅は、ほとんど後に入ってきたものになる。在来種の梅は、春にもう一度開花し、入梅前に実が熟れた。むらの人々はその梅の実をかんでみて、その熟し具合で梅雨の訪れを判断していたという。

旧暦の3月になると、むらの人々は、向かいの山の下手の尾根筋を気にするようになる。向かいの山の略図を図1に示したが、まずこの図のAの地点に視線を走らせた。

この尾根にコブシ（もくれん科）の白い花が咲くと、マイモ（サトイモ）を麦の中に植える。この時期をのがすと麦が伸び、植えつけが困難になる。

「サァ、コブシが来たけにマイモを植えにゃ」

「これから油断ならんぞ。朝寝しちやいかんぞ」

そう言いあったものだという。これが春の農作業の始まりとなる。コキビを屋敷周囲の畑に播くのもこの時期である。Aの尾根よりも少し下手に滝があり、ここにもコブシの木があった。むらの家々からは見えないのだが、この時期、所用で下手に行く折には、その開花に注意を払った。そこの花が咲いて2日ほどで、Aのコブシが咲くからである。

次にはやはりAでヤマザクラ（ばら科）が開花する。これはカライモ（サツマイモ）のタネをふせる目安となる。

次にBの場所にヤマザクラが咲く。これはハタイネを播く時期を示している。ハタイネとは、畑に播く稲で、現在は仁尾ヶ内ではつくられていない。在来のハタイネをこのむらでは私は見えていないのだ

が、ハタイネは水田の稲より茎が太く、モチとウルチがあり、各々ノゲの長いものと短いものがあったという。前者のほうがねばりがあった。

Bにヤマザクラが咲く頃、その奥のCの尾根にはコブシの花が咲いている。農作業の目安となる花は、コブシ、ヤマザクラ、シノブザクラなどだが、この順に2日ほどおくれつつ、AからB、BからCと次第に奥へと花を咲かせていく。

ヤマザクラの花が、AからDへ移るのに1週間ほど要したという。この間に畑にタカキビを播く。タカキビは三土用——春、夏、秋の土用——を過ぎぬと収穫できぬといわれていた。まず苗を立て、麦を刈ったあとの畑に移植するが、焼畑で三極の間作に播くこともあった。

山の雨

アワも桜の開花からナガセ（梅雨）の間に播種する。時期をおくらせると空実の多い穂がつく。

ヤマザクラがBからDに移る期間が、焼畑に火を入れ、ヒエを播く時期となる。けれどもその奥のアカタキという尾根（E）にシノブザクラが咲くと、ヒエ播きは一旦控える。というのは春になっても「寒のもどり」と称して、もう一度冷えこむ時期があり、それは、このアカタキにシノブザクラが咲く頃に播いたヒエが芽を出す時にぶつかり、この冷気にあたったヒエはシビル(枯れる)ためである。このことを、むらの人は「アカタキシノブにもとたたず」という表現で伝えてきた。

こうした山の樹木の花と作付の流れに、さらに春の断続的な雨が重なる。

ヤマザクラが咲き始める頃、数日雨の日が続く。これをキノメナガシ、キノメオコシ、ナタネツユ、コオナガシなどと呼ぶ。木の芽が出始め、ナタネが咲き、コオ（シキビ/シキミ もくれん科）の白い花が咲く時期の雨である（新暦では4月中旬頃にあたることが多い）。

さらに数日して降る雨をアセビナガシという。アセビ（つつじ科）の白い花が咲く頃の雨である。アセビナガシが上がる頃には、春の彼岸も迫っており、コブシの花は尾根の下手から上手へと咲き抜けてい

写真3 仁尾ヶ内のむら



写真3-a 楮や三極を蒸す施設と、皮をはがれた幹の束。(2003年11月)



写真3-b イノシシが掘り出したクズカズラの根。(2003年11月)



写真3-c イノシシの寝床、カルモ。民家のすぐ裏にあった。(2004年7月)

る。コブシの花が咲き抜けると、4、5日ほど晴れの日が続く。これを八日陽^{ようかび}という。旧暦4月8日前後の晴天を指している。ヒエを播くために山を焼くのはこの時期である。

この時期をのがすと、トチノトオナガシと呼ばれる雨が降る（これは新暦では5月はじめにあたることが多い）。短くて4、5日、長いと7、8日ほど、ぐずついた日が続き、ヒエヤマの火入れが延びる。トチノトオとはトチノキ（とちのき科）の新芽のことである。トチノトオナガシは暖かくなっていく目安の一つであり、この雨にかかると干している三極に腐りが出る。この時期まで三極作業が続いている家は、それだけ三極に力を入れ大量に作付・出荷をしている家である。そのため気をせかせる雨である。尾根に桜が咲き抜けていく頃、2、3年に一度の割で強い南風をともなった雨が数日降ることがある。

これをサクラアラシと呼ぶが、この時も干している三極は腐り始める。トチノトオナガシの時期はさらに暖かくなっているだけに腐りも早い。

トチノトオナガシが終わらぬうちに、在来種のヤマグリ——のちに入ってきた栗より小ぶりの実をつける——の花が咲く。この花が満開になる頃ホンナガシ（あるいはホンナガセ、単にナガシ、ナガセともいう。梅雨）となる。

ホンナガシの少し前にはクリノトオナガシという雨が降る。ヤマグリの開花頃の雨だが、この花が満開時にその雨が1週間もつづく、その年のクリは不作となる。ホンナガシが早く来てクリノトオナガシと重なる年も同様である。

サコに消える

このためヒエづくりの焼畑は、トチノトオナガシ

の前の八日陽のうちに焼いておかねばならない。八日陽の晴天の続き具合は、対岸のサコ（沢）の霧の晴れかたで判断した。早朝の霧が、1、2時間のうちに、このサコに向けて、サーッと沈むように消えていくと、3日のうちに雨になった。霧が昼まで動かずにいると、2日や3日は晴れがつづいた。これは、夏のソバ作の焼畑の折でも同様で、朝、霧がそのサコに消えると、他の農作業を放っておいても、「サア焼かにゃいかん」と、山へ向かったという。

また、北風の日は、その後2、3日は晴れが続き、南風が吹くと天気が崩れるとあって、これも目安とされていた。

朝霧や風の具合を見て、八日陽が2、3日しかもたぬようだと、三極の皮はぎを途中で止め、苗の植えつけを延ばしても、山を焼き、ヒエを播く。これはそのまま次の年の食糧の確保に影響していたからである。そんな年は、むらうちでも、ことに天候に敏感な者の動きを見て、他の者は従った。むらには天気を予測するに長じた人が何人もいた。釣り好きのある老人はアメゴのあたり具合によって、ある老人はミツドウの蜂の夕方時の出入り具合によって、常人が驚くような予測をしたという。

また、八日陽に山を焼いても、前述したように、その時アカタキの尾根にシノブザクラが咲くようなら、播種は桜の花が散るまで待ったという。

焼畑は、焼いたあとに播く作によって、ヒエヤマ、ソバヤマ、大豆ヤマ、麦ヤマ（これは主にハダカ麦）と呼び分けられている。ヒエヤマは自給用の食糧確保の性格が強く、後三者は、自給用の食糧確保はもちろんだが、それ以上に三極を植える地ごしらえとしての意味合いが強かった。

面積の上で大きかったのはヒエヤマとソバヤマで、これらを焼くのは新暦でいえば8月のことになり、麦ヤマは、秋に定畑の麦よりひと足早く山を焼いて播く。春の焼畑はヒエと大豆である。

大豆ヤマは、ヒエヤマやソバヤマに比べて面積も少なく、播く時期もおそかった。山のウツギ（ゆきのした科）の白い花が咲くのが播種時期の目安となる。新暦5月末の頃に山を切り、梅雨の合間の晴れた日に焼く。それまでには、ヒエヤマの草取りや、

三極の中耕の仕事が続く。三極の中耕を少々おくらせても、ヒエの手入れを優先して作業日程をすすめた。

段どりの順列と組合せ

このように、春から初夏にかけての対岸の山の樹木の開花の様子と断続的な雨との組み合わせの中で、農作業の手順が組まれ、すすめられていった。その組み立ての中ではヒエヤマの火入れが強い優位性を持っていたが、その除草作業も同様に優先されていた。

「先の仕事を残しても、その先の仕事をせないかん。あっちの仕事が先か、こっちの仕事が先か、三極もはようシナさな（皮をはいで干さない）いかん。天気に応じて、仕事のすすみ具合に応じて（農作業を）組み立てますわ」。

「ふつうの畑と違って、焼畑は1週間もおいといたら、草とりの手間が2倍も3倍もかかるんです。たびたび行かにゃいかんのです。田植えの時でも、稲は苗をたてとるけん、植えるのが10日や20日違っても収穫に影響がないということで、山にヒエの草取りに行ったもんです」。

と、茂友さんは話されていたが、もちろん農作業としてはこれらのほかに、年末から始められる椿や三極の皮はぎ、及びその乾燥作業も春先まで続けられており、焼畑に植える三極の苗の仕立て、コキビ、トウキビ（トウモロコシ）などの定畑への播種などが、前述した作業の合間をぬって行われた。

これら一連の作業の間は、家の行事もむらの行事もほとんどない。

ナガシの前には菜種を刈った。数日干して棒で叩いて皮と種を分かす。その種を商人が買いに来た。ナガシ（梅雨）に入れば、それまでほどの気ぜわしさはなくなるが、それでも三極の中耕、ソバヤブ切りを行った。雨の合間の晴れた日を見て麦刈りも始まる。刈ったあとは、すぐに草を手で抜いておく。これが4、5日でもおくれるとそれだけ除草に手間を要する。

一方、水田の苗代をたてるのは、八十八夜をすぎたからになる。シカノタチと呼ばれている山草が、

一尺ほどの背たけになると、苗代の手配りを考えたものだという。たてた苗代を蛙がかきまわすため、夜にあかりをともして蛙を除く仕事も加わる。

梅雨がすぎ半夏の時期になると1週間から10日ほどの降雨がある。田植えはその水で行う。この水をハンゲミズと呼んでいる。現在より2ヵ月ほどおそい田植えであるが、かつては裏作に麦をつくっており、それを刈り上げた後でないと稲は植えられず、さらにはこれまで述べてきたような山作の忙しさに区切りをつけた後でないと、田ごしらえにはとりかからなかった。

「ハンゲいうたらビワが熟れるし、ビワが熟れたぞ、サァ田植えじゃいうて、かまえたもんです」。

ハンゲミズが少ない年は、田植えができず、苗代に稲株をおいたまま田が干あがってしまったこともあったという。

「ハンゲ水が出んでね、この下の1反5畝ほどの田で、1俵もできんやったことがあるんです。その頃は反当り2俵半ばァじゃったがね。いよいよ水が出んで、稲苗が50日も60日もなった時は、田に大豆をまくのよね。そんなことが何回かありましたぞね」。

ウチノの家の対岸のカゲジの山すそには、3軒の家が並び、その前に田が作られている。カゲジは水が豊富であり、またその名の通り日照時間が短いこともあって、本むらより早く苗代をしたてる。カゲジの苗代の苗が2寸余り伸びると、本むらからもその苗代田の面の色づきがはっきりと見てとれる。このカゲジの苗の緑色が見え出すと、本むらでは苗代づくりを始めた。

逆にカゲジの家々では、ウチノの屋敷を見上げ、その背後の斜面にツツジが咲くと田植えを始めたという。カゲジではこれをタウエツツジと呼んでいた。これはサツキツツジ（つつじ科）で、ウチノの3代前の戸主友太郎が他から苗を持って来て植えたものだという。

ツツジに関しては、さらにその後に他からさまざまな品種が持ちこまれた。かつて共有山に入れば、ミヤマツツジ、カラヤマツツジと呼ばれる2種の自生のツツジがあったそうだが、現在はほとんど見ら

れないという。

現在、このむらにここで述べてきたような生活はない。最も若い住民の方でも70歳を越している。戸数は10戸余り。むらの生産共同体としての営みはきわめて微力になってしまい、三極をつくっている家は2軒、それも生計をたてるには程遠い量である。山の手入れも十分でなく屋敷の庭にまで猪や猿が侵入してくる。杉林を歩くと鹿の被害が目につく。前述したかつての暮らしで示したような形で、つまり生産暦、生活暦の流れに沿う形で「環境認識」のありかたの現在を調べることが、二つの時代の比較資料をつくることではないように思う。まず、むらの構造に正面から向き合うことから始めるべきであろう。結局は後世に様々な形で利用し得ると思われる豊かな民俗誌、生活誌をするすとはどのようなことかというところに帰着してしまう。これではあまりにあたりまえすぎて結びにはならないのだが、問題の所在はきわめて基本的な場所に求められるように思う。

はじめにもどって

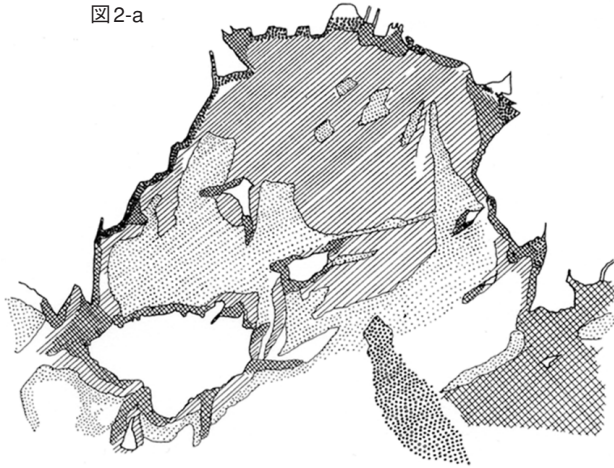
「環境」という言葉

民俗伝承の世界において、認識された「環境」とは、多くはなにかの営みの結果、そこに生まれた認識の一つの体系である。それはある手段に付帯するもの、あるいはそこから生まれた状況を反映するものであろう。だとすれば、それを手段として働かせた主体をどうとらえるか、どう記述するのかという問題は本質として存在する。そして「環境」という概念を検討する視点で、これまでに書かれた地域に即した形をとる諸報告書、民俗誌に目を通すと、その蓄積がきわめて薄いことが指摘できる。こうした点への批判は容易なのだが、ではなぜこれまでそうした報告書、民俗誌が多く書かれつづけられてきたのか、かつてのデータの欠落への目配りは新しい試行の場にこそ必要とされよう。それは「民俗」ととって「環境」とはなんであったのかを別の面から把握することにもつながる。

図2 広島県豊田郡安芸津町の湾の海底の様子の変遷

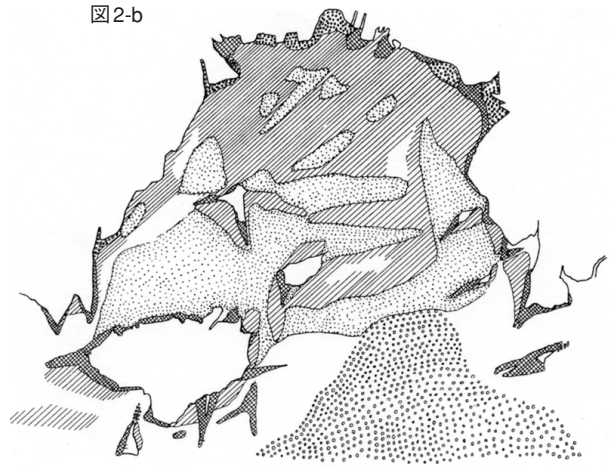
以下のa、b、cの図は、三津湾の漁民が網の手ごたえをもとに作成した海底の変化の様子。
(進藤松司『瀬戸内海西部の漁と暮らし』平凡社 1994年より)

図2-a



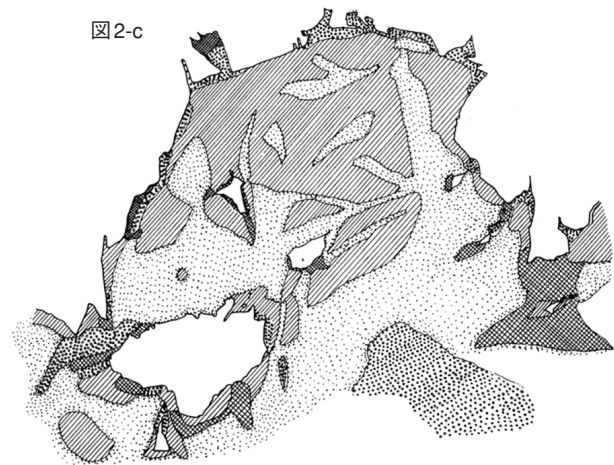
明治末年頃までの海底状況。斜線は藻の茂っている海底。2本の直交斜線は岩底。黒点は泥土の底。白点は磯砂の底。

図2-b



同じく大正10年頃までの海底状況。

図2-c



同じく昭和10年頃～15年までの海底状況。

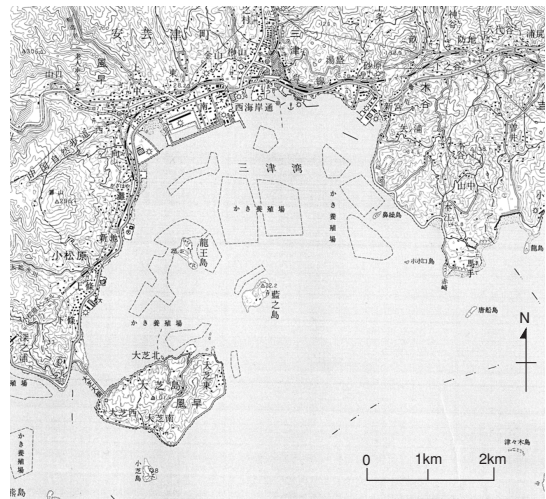


図2-d 5万分の1の地形図「三津」の三津湾。

もちろんこの場合、「環境」というわかったようではっきりしない言葉になんかの定義性を持たせなければならないのだが、拙稿ではとりあえず生産生活での生産手段という切実な世界の中でそのことを考えてみようとした。たとえ同じむらの同じ生産の場所でもその切実さが消えた時、あるいは変わった時、「環境」そのものの体系性もまたちがったものになる。たとえば、前述した海人社会の総体において、海人社会の知恵や技はアワビを採ることからタチウオ、シビ、カツオの釣漁へと急激に比重を

移しつつある。あきらかに海への向き合い方や認識が変わりつつある。しかしこの新旧二者の認識は、互いに無縁でもなければ背反するものでもない。ではどのような関係性の中での変化なのだろうか。そうしたことに対してこれまで民俗学はどのような試行作業の蓄積を持ち得、展望を持ち得ているのか、そのことを思わざるを得ない。

蓄積が薄いジャンルに直面している時こそ、実は「蓄積」とは何かということが問われてもいる。かつては山あてをし、海底の状況を引いた網の手ごた

えで把握していた漁民がいた。その例を図5で示したが、現在この海域の漁氏の多くは、魚群探知機やGPSを駆使して魚を追っている。そしてそうした機械類を装備しても、水揚げには違いがあらわれる。そのことを新たな問題として追うような道筋をこの学問はつくってきたのだろうか。

農協を通さずパソコンのネットワークのみで作物を販売している専業農家は増加している。彼らがつくり上げつつあるつながりは「民俗」の範疇には入らないのだろうか。「民俗学」の現在への問いかけ、

実はそれがこのプロジェクトの始点の一つでもあったが、今はまだそれから進んではない。始点を確認することで5年を経た。それがまともにもならないまともになる。

少なくとも神奈川大学のCOEプロジェクトの遂行形態は、フィールドワークの要求する柔軟さと相入れない官僚的硬直さを過度に持つものであった。ここでやっとその枷からときはなたれて問題の本質に向きあい得る時が来たようにも思っている。

(かつき・よういちろう)

【注】

- (1) この中間報告は「歴史と民俗」20、21号（神奈川大学日本常民文化研究所刊 2004、2005年）に各々「海人のむらの民俗法から」（上）「同」（中）という形のレポートとしてとりまとめている。
- (2) 『山に棲む 民俗誌序章』（拙著 未来社 1995年）